



日光 金谷ホテル

The Kanaya Hotel

[古写真DATA] 長崎大学附属図書館蔵

写真名称：日光金谷ホテル⁽²⁾
 英語名称：NIKKO KANAYA HOTEL
 目録番号：477
 撮影者：玉村騎兵衛
 アルバム名：玉村騎兵衛アルバム
 撮影地域：日光
 年代：明治26年以降
 色彩：カラー
 形状：249x193
 整理番号：11 7 0
 キーワード：近代建築 / 男女

古写真に見る

近代ホテルの黎明期

4

日本の開港直後は、居留地の外国人は近隣以外に自由に旅行することは厳しく禁止されていた。

明治7年(1874)、「内地旅行規則」が制定され、規制緩和されて横浜居留地から日光への旅行が可能になった。このとき問題になったのが西洋式の宿泊施設である。日光東照宮の楽人であった金谷善一は、明治6年6月、夏学期間だけ自宅と隣の家屋を借りて、「金谷カッテジ・イン」の開業を始めた。日本を代表するクラシックホテル、「日光金谷ホテル」の創業である。

当時の「金谷カッテジ・イン」の詳細が、英国女性のイザベラ・バードが著した「日本奥地紀行」の中で、明治11年6月の「金谷家にて」に記されている。「家は簡素ながらも一風変わった2階建てで、石垣を巡らした階段上に建っており、」。

明治初期には、東京から日光へは人力車で3日を要したが、明治23年8月1日、宇都宮・日光間に鉄道が開通した。日光は、外国人や日本の富裕層にとって、東京から1日で行ける絶好のリゾート地になった。

外国人旅行者が増えると、日光

では熾烈なホテル競争になった。

明治22年(1889)、「日光ホテル」が開業する。明治24年、「新井ホテル」が開業する。明治26年4月、「金谷カッテジ・イン」は日光にあった「三角ホテル」を買収修理し、「日光金谷ホテル」と命名する。写真はこの頃の「日光金谷ホテル」を撮影したものである。明治30年「新井ホテル」は「日光ホテル」を買収して、「日光ホテル」の名で営業する。明治35年「日光金谷ホテル」は大食堂と客室12室を増築する。大正15年(1926)正月、「日光ホテル」は火災により焼失した。

日光と長崎の間には意外な関係がある。グラント將軍(第18代アメリカ大統領)は世界周遊の途程中、最初の上陸地が長崎で、明治12年6月21日のことであった。これを記念して諏訪神社に「グラント將軍手植榕樹記念碑」が造られた。その後東京に行き、7月後半、

日光に滞在している。

グラバー邸で有名なトーマス・グラバーもしばしば奥日光の中禅寺を訪れ、鱒釣りを楽しんだ。中禅寺湖畔に別荘を建て、日光の湯川で、日本で最初の鱒の放流を行っている。息子の倉場富三郎は、リンガー一家と一緒に何度もの湖畔の別荘で夏季を過ごした。後に富三郎は、明治40年(1907)に長崎汽船漁業を設立し、日本の水産業の近代化に尽くした。このとき採取された魚より、「日本西部及び南部魚類図譜」(グラバー図譜)が作成された。この図譜は、長崎大学附属図書館のホームページで閲覧できる。

「幕末・明治期日本古写真画像メタデータベース」で検索すると、「日光」は【408件】検出される。金谷ホテル【9件】、日光ホテル【2件】、鈴木ホテル【1件】であった。

【幕末・明治期日本古写真画像メタデータベース】

<http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp>

参考：幕末・明治期日本古写真メタデータベース

日本西部及び南部魚類図譜、グラバー図譜、電子版メタデータベース
 福田和美、日光避暑地物語(1996、平凡社)
 常盤新平、森と湖の館(1998、潮出版)

工学部教授

岡林 隆敏

Okabayashi Takatoshi